

「過ぎた正義」

— 2 稿 —

2026/05/12

山極 瞭一朗

〈人物表〉

佐渡 正義 (25) バー店員

箸屋 麗華 (25) 刑事／みきなの後輩

加賀谷 和子 (24) 会社員

伊佐 諒太 (8) 万引き少年

御堂 一世 (56) 銀行員

相木 愛 (31) バー店長

和道 みきな (32) 刑事

店長

1. 山奥（夜）

深い森の中、大雨が降っている。

土の中から、頭蓋骨と思しき骨が露わになる。

2. 山奥（昼）

雨は上がり、強い日差しが照り付ける。

一帯は規制線が張られ、警官たちが各々作業中。

ブルーシートが囲われた一角。

その中、10体近くの人骨が並べられている。

シャツの袖をまくった刑事の和道みきな（32）、

ハンディファン片手に人骨を睨んでいる。

隣の後輩刑事、箸屋麗華（27）はメモ帳片手に、

麗華 「ひとり身元が割れました」

みきな、麗華を見る。

麗華 「御堂一世。光明銀行経伝支店の副支店長です」

みきな 「経伝……」

麗華 「行方不明者届が出されていました」

みきな、ぐっと眉間に皺を寄せる。

3. 繁華街（昼）

大勢の人が行き交う。彼らはみな、うだるような暑

さに顔を歪めている。

好青年然とした佐渡正義（25）、人の流れに逆行

するように、真っ直ぐ前を向いて歩いている。

4. バー・外観（昼）

「CLOSED」の看板。

正義、入る。

5. バー・店内（昼）

落ち着いた雰囲気、薄暗い店内。カウンターには日

本酒が様々並べ置かれており、内側ではマスターの

相木愛（31）がPCで経理処理をしている。

エアコンには「故障中」の張り紙。扇風機がけたた

ましい音を立てている。

正義、入って、元気よく、

正義 「おはようございます」

愛、時計をチラ見、ため息を漏らして、

愛 「早くない？」

正義 「今日はあれ、直そうと思って」

と、エアコンを指さす。

愛 「業者に頼んだ」

正義 「全然、僕できます」

愛 「全然って何？」

正義 「はい？」

愛、再びため息をつく。

愛 「あのさ」

正義 「はい」

愛 「はっきり言っていていい？」

正義 「できればオブラートでお願いします」

愛 「ありがた迷惑」

正義 「え？」

愛 「言われたことだけやって」

正義 「いやでも、おばあちゃんに言われています」

愛 「おばあちゃん？」

正義 「人のためになることは何でもするべきだと」

愛 「は？」

正義 「僕が暑いから、エアコン直そうとしてるわけじゃなくて、

みんなが——」

愛、遮って、

愛 「とにかく、それ以上のこと、求めてないから」

正義、思い出したように手を叩き、

正義 「じゃあ買い出し行きますよ。ナッツ足りな——」

愛、食い気味に、

愛 「ナッツ足りない。行ってきて」

正義、笑顔を見せて、

正義 「ラジャーです」

と、そそくさと出ていく。

愛、正義を見て、舌打ち。

6. スーパー・店内（昼）

正義、レジかご片手におつまみコーナーを散策中。
よれよれのシャツに短パン姿の伊佐諒太（8）、周
囲を警戒しながら、駄菓子を物色している。

正義、駄菓子コーナーにやって来る。

その瞬間、諒太、駄菓子を鷲掴みし、服の中へ。

正義、目撃し、思わず、

正義 「君」

諒太、ハツとして逃げ出す。

正義、かごを落とし、追いかける。そしてすぐに諒
太の腕を掴む。

正義 「それ、犯罪だよ」

7. スーパー・バックヤード（昼）

諒太は店長と対面してる。テーブルには万引きしよ
うとした駄菓子。

正義、諒太の傍で直立不動。

店長 「今日のところはまあ、嚴重注意ということだ」

正義 「はい？」

店長 「はい？」

正義 「犯罪ですよ。見逃すんですか？」

店長 「見逃す？」

正義 「万引きです」

店長 「未遂で済みましたし、子供ですし」

諒太、しゅんとして縮こまっている。

正義 「いやいや、それじゃダメでしょ。悪いことは悪い。いい
ことはいい。そこはつきりしないと」

諒太、小声で、

諒太 「……ごめんなさい」

正義 「また同じこと繰り返しますよ。いいんですか」

店長、迷惑そうにため息をつき、

店長 「もうしないよね」

諒太、震える視線で正義を見つめ、こつくりと頷く。

正義 「僕は人のために……」

店長 「はい？」

正義 「いえ」

正義、拳をぎゅっと握りしめる。

8. 繁華街（昼）

行き交う人々の流れに逆行する正義。

巨大ビルの壁面にモニター。ニュースが流れている。

正義、ピタッと立ち止まる。モニターを見上げる。

『神奈川の山中 14体の人骨 連続殺人か』の文

言と、山奥の規制線の外側で中継するリポーターの

映像。

正義の瞳は、真っ直ぐにモニターに注がれている。

額にじっとり汗が滲む。

正義、汗を拭くと、頬を歪める。

9. フィットネスジム・タ（夕）

加賀谷和子（24）、ランニングマシンに乗り、走っている。

傍にはみきなど麗華。

麗華はスマホを和子に見せている。

画面、御堂の画像。

和子、停止ボタンを押す。マシンから降りて、ベン

チに座る。汗を拭って、

和子 「電車によく会ってましたね」

と、迷惑そうに、

和子 「よく見てくるんですよ、いやらしい目で」

和子、画面の御堂を指さす。

和子 「それに距離も近かったし。他の席空いてるのに隣に座っ

てきたり」

麗華 「直接的なことは？」

和子、思い出したくもないのか、顔を歪めて、

和子 「触られましたよ、気色悪い」

麗華 「警察には？」

和子 「相談してどうかなります？」

みきな、その質問には答えず、

みきな 「彼氏に相談とか？」

和子、ごくりと水を飲んで、

和子 「いませんよ。あ、でも」

みきな 「？」

和子 「相談っていうか、話しました。同じ電車に乗ってた人」

みきな 「知り合いですか？」

麗華 「いえ、声かけられたんです。『痴漢されてますよね』っ

て。でもそれからです、痴漢男と会わなくなったの。ど

うしてんだろ」

みきな、何でもないことのようにさらりと、

みきな 「死にましたよ」

10. バー・店内（朝）

正義、掃除している。

エアコンは修理されたようで、稼働している。

愛、何か言いたそうに正義を見るが、やめる。

みきなど麗華、入る。

愛 「すみません、まだ準備中で」

麗華、警察手帳を提示して、

麗華 「こういうものでして」

正義、構わず掃除を続けている。

麗華 「佐渡正義さん、お勤めですよね」

正義、手を止める。

みきな、正義を見やる。

愛 「佐渡なら……」

正義、**（ごくつと息を呑む）**

みきな、正義に近づき、

みきな 「佐渡さん？」

正義 「あなたは？」

みきな 「和道といます」

正義 「和道さん」

みきな 「先日、山中で14体の人骨が発見されました」

愛、ハツとして息を呑む。

麗華 「あなた、数ヶ月前、被害者のひとりとトラブルを起こしてますよね」

正義 「トラブル？」

みきな 「痴漢を注意した」

正義、思い出したように、大きく手を叩く。

正義 「はい、助けました」

麗華 「助けた？」

正義 「彼は痴漢したんですよ」

麗華 「それで殺したんですか」

正義 「それでって、痴漢を軽視してますよね」

みきな、ぐっと正義に近づき、

みきな 「殺すには値しない。少なくとも常人なら殺さない」

正義、いたって平然と、

正義 「ですから、彼女を助けるためにしたことです」

みきな 「認めるということですね」

正義、ため息をつき、

正義 「理解されないのには慣れてます。でも僕は人のためにしたんです。100%の善意です」

みきな 「行き過ぎた正義感ですね」

正義とみきは睨み合う。

(終わり)